

笑いに対する意識と対人コミュニケーション

福島明子*

Consciousness of laughing and interpersonal communication

FUKUSHIMA Meiko

abstract

Relationship between the function, consciousness, social skills, and coping strategy in interpersonal conflict related to laughing were investigated. Factor analysis was performed with four types of laughing: four factors of humor (psycho-social effect, wit, satire, and concealing feelings), four factors of a smiling (psycho-social effect, concealing feelings expressiveness, social laughing, and wit), five factors of laughter (psycho-social effect, stress reducing, wit, superiority, and social laughter), and comedians' laughter (psycho-social effect, frivolousness, relaxation, and entertainment). All types of laughing had a psycho-social effect. Wit and social laughter were related to more than two kinds of laughing. Concealing Feeling, satire, and superiority were emotional expression not related to laughing. Humor had different functions, such as making cooperative relationships with others with witty humor and attacking others with sarcastic humor. Smiles were used to conceal feelings and avoid conflicts. Laughter allowed a person to express oneself in interpersonal conflicts without surrender, or avoidance, while also at the same time expressing an aggressive meaning. Comedians' laughter was different from other types of laughing. A person who enjoyed laughter had higher social skills and coped cooperatively with interpersonal conflict.

Keywords : humor, smiling, laughter, comedian's laughter, social skill, interpersonal conflicts

問題と目的

笑いについては、発生のメカニズム(志水、2000)、文化的差異(札幌、1999; 礎、2003)などさまざまな観点からの研究がなされている。最近特に注目を集めているのは笑いの健康への影響で、免疫力を高める(伊丹、1997; 伊丹、1998; 西田・大西、2001)、ストレスを緩和する(高下・上野、1991)などの効果が指摘されている。

対人場面における笑いに関する研究も少なくない。たとえば、対人場面の笑いの大半は会話中に起こり、また笑いながら話す現象は状況と強く関連し多様な機能を持ち(桐田、2005; 2003)、笑顔はより社会的で知性的と判断される(Matsumoto & Kudoh, 1993)。一緒に見る相手が親密なほどテレビのお笑い番組を面白いと感じ、親密でないほど相手に同調して笑う(志岐、2006)などである。以上のように、対人場面での笑いの意図、知覚、表出は状況や相手の影響を受け、また印象形成に影響を与えることが確かめられている。

ところで笑いは、笑い声の有無による分類、意志の笑いと感情の笑い(浅田、2004)、快の笑い・社交上の笑い・緊張緩和の笑い(志水、2000)、正常な笑いとは異常な笑い(角辻、1996)など、研究者によりさまざまに分類されている(浅田、2004)。この背景には、笑いの送り手・受け手、笑いの意図や原因、笑いの表出方法等々、さ

キーワード：ユーモア、微笑み、声を出して笑う、お笑い、社会的スキル、対人葛藤

*平成10年度生 人間発達科学専攻(作新学院大学)

まざまな視点が混在していることがあげられよう。また笑いの呼称の多様さは人間の微妙な感情表現の現れと解釈できる(井上, 2002)。しかしながら笑いの研究は、こうした多様な笑いの分類を考慮することなく検討されている場合も少なくない。笑いのひとつに芸人によるお笑い(以下、お笑い)と記述)がある。お笑いに関する研究は主に以下の3つに焦点をあててなされる場合が多い。第一に、お笑いの機能そのものに焦点をあてた研究である[たとえばお笑いの地域性に関する研究(札幌, 1999)など]。第二に、漫才などのビデオ視聴前後に生理的指標の測定がなされるといったように、健康への効果を検討する際に呈示刺激として用いられる。第三に、タレントの役割期待と笑いの知覚、反応を検討した研究(志岐, 2006)など、お笑いの視聴者への影響についての研究であるが、前者2つに比べるとこの点に関しては十分に検討がなされているとはいえない。

以上のことから本研究では、笑い刺激としてユーモアとお笑いを取り上げ、また笑い反応を笑い声の有無により微笑みと声を出して笑うに分け、これら4種類の笑いが受け手にもたらす機能を探り、それぞれの笑いに対する意識について検討を行った。また、笑いの意図や知覚、表出が状況や相手に依存し、印象形成に影響を与えることが指摘されてきたことから、笑いに対してどのような意識をもつかと対人コミュニケーションには関連があるといえる。そこで本研究では、笑いに対する意識と、他者と円滑な対人関係を形成・保持していくために必要な社会的スキル、および対人葛藤場面における対処方略の関連について検討を行った。

方 法

1. 予備調査

(1) 調査対象

栃木県内の大学生64名(男子28名、女子36名)。平均年齢20.0歳。

(2) 調査年月: 2007年4月。

(3) 調査内容と結果

① 笑いに対する意識

ユーモア、微笑み、声を出して笑うこと、お笑いそれぞれが、被調査者にとってどのような意味をもつか自由記述で回答を求め、アフターコーディングにより各笑いの意味の分類を行った。1人の回答に複数の内容が含まれている場合は別々にカウントしたところ、以下のように分類された(数字は回答数)。

ユーモア: 場の雰囲気をよくする15、対人関係の潤滑油13、ネガティブな効果や意味をもつ7、TPOによって効果や意味が異なる6、嫌い・不快5、リラックス5、楽しい5、笑う4、良い3、知的2、ストレス解消1。以上76回答。

微笑み: 安心する9、嬉しくなる8、社交辞令8、対人関係の潤滑油6、印象形成6、自然に出る6、他者の受容・他者への思いやり5、気持ち・感情の表現4、ネガティブな感情・体調を隠す3、良い2、リラックス2、性的魅力2、ストレス解消1。以上70回答。

声を出して笑う: 気分・感情の向上16、ストレス解消15、場の一体感・他者との親密感11、面白い7、自然体6、健康5、不快感、違和感4、不意の出来事3、リラックスする3、良い2、自己表現2。以上74回答。

お笑い: プロの笑い15、ストレス解消10、面白い9、気分・感情の向上9、娯楽8、つまらない6、一時的なもの6、嗜好性が強い3、リラックス3、癒し2、好き2、健康1、その他4。以上83回答。

② 対人葛藤体験

対人関係において最も困難を感じる相手、場面、対処法について自由記述で回答を求めたところ、以下のように分類された。

相手: 友人47、家族28、バイト14、知人10、サークル8、親戚7、恋人6、親友4、先生1、その他1、なし1。以上127回答。

場面: 会話38、意見・価値観の違い12、他者同士の関係9、すれ違い・けんか7、集団6、他者の悩み6、相手の性格6、言葉遣い4、文句4など129回答。

対処法: 回避40、協力11、傾聴11、忍耐8、譲歩7、努力6、言葉遣い5、主張5、妥協5、笑顔4、認知4など127回答。

2. 本調査

(1) 調査対象

栃木県内の大学生103名（男子50名、女子53名）。平均年齢20.5歳。回答に欠損がみられた場合は分析から除外した。

(2) 調査年月：2007年5～6月。

(3) 調査内容

- ① 笑いに対する意識：予備調査結果をもとに、ユーモア、微笑み、声を出して笑う、お笑い4種類の笑いそれぞれについて、「緊張をほぐす」「コミュニケーションを促進する」「本音を隠す」など、笑いの機能を問う20項目を作成した。なお、主語や目的語が変化させてあるだけで、各笑いの20項目は同じ内容とした。たとえば「ユーモアは緊張をほぐす」「微笑みは緊張をほぐす」「声を出して笑うことは緊張をほぐす」「芸人のお笑いは緊張をほぐす」などである。選択肢は5「そう思う」～1「そう思わない」の5段階評価とした。
- ② 社会的スキル：「菊池の社会的スキル尺度（KiSS-18）」（菊池、1988）を用いて社会的スキルを測定した。
- ③ 対人葛藤場面における対処方略：大淵（2005）を用いて7つの対人葛藤対処方略〔積極的方略（主張、攻撃、交渉、宥和）、消極的方略（拒否、服従、回避）〕を測定した。選択肢は5「そう思う」～1「そう思わない」の5段階評価とした。

結 果

1. 笑いに対する意識と社会的 スキル

(1) 各笑いの機能の因子構造

ユーモア、微笑み、声を出して笑う、お笑いそれぞれについて主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上、累積寄与率60%以上を目安に因子の数を決定し、因子負荷量.50以上をもつ項目を採択した。声を出して笑う以外の3つの笑いでは2因子に.50以上の因子負荷量をもつ項目があり、それらの項目を削除しながら因子分析をくり返した。その結果、ユーモア4因子（ $\alpha = .80$ ）、微笑み4因子（ $\alpha = .83$ ）、声を出して笑う5因子（ $\alpha = .84$ ）、お笑い4因子（ $\alpha = .82$ ）が抽出された。

- ① ユーモア（表1）：第I因子は気持ちがすっきりする、癒されるなどの心理的効果と、親密になれる、コミュニケーションを促進するなど対人関係促進効果を表す項目から成り「心理社会的効果」と解釈された。第II因子はセンスや知性のある笑いで「機転」、第III因子は皮肉で軽い笑いで「風刺」、第IV因子はネガティブな感情を隠す笑いで「感情隠蔽」と解釈された。
- ② 微笑み（表2）：第I因子はユーモアと同様「心理社会的効果」であった。第II因子は「おかしいから微笑む」というストレートな感情表現、および「深刻さをまぎらす」というネガティブな感情を隠す項目から成り「感情表出・隠蔽」、第III因子は本音を隠したうわべだけの笑いで「社交上の笑い」と解釈された。第IV因子はユーモアの第II因子と同様「機転」であった。
- ③ 声を出して笑う（表3）：第I因子はユーモアや微笑みと同様、「心理社会的効果」であった。第II因子は笑って気持ちがすっきりすることから「ストレス発散」と名づけた。第III因子はユーモアの第II因子、微笑みの第IV因子と同様「機転」と解釈された。第IV因子は「他者への思いやり」項目が因子負荷量がマイナスで他者をばかにした不快な笑いであり「優越」と命名した。第V因子はその場を取り繕う「社交上の笑い」と解釈された。
- ④ お笑い（表4）：第I因子は他の笑いと同様「心理社会的効果」であった。第II因子は人をばかにした不快で表層的な笑いで「軽薄」、第III因子は気持ちや対人関係が和むことから「和み」、第IV因子は話題にのぼるような知性やおかしみのある笑いで「娯楽」と解釈された。

表5は、各笑いについて因子ごとに平均値を算出した結果である。分散分析の結果、微笑みは感情を表出・隠蔽するという意識は男子の方が強く、声を出して笑うことはストレス発散になるという意識は女子の方が強かった（各 $F(1, 101) = 5.11, p < .05$; $F(1, 101) = 6.59, p < .05$ ）。

表1 ユーモアの機能の因子構造

項目	I	II	III	IV	共通性
第I因子：心理社会的効果 ($\alpha = .88$)					
ユーモアで気持ちがすっきりする。	.83	-.02	-.14	.07	.71
ユーモアに癒される。	.82	.08	-.06	.19	.73
ユーモアは健康に良い。	.79	.06	.01	.01	.64
ユーモアで人と親密になれる。	.68	.40	-.10	.05	.64
ユーモアはストレス発散になる。	.67	.36	-.19	.21	.66
ユーモアはコミュニケーションを促進する。	.65	.23	.44	-.14	.68
ユーモアは人に良い印象を与える。	.63	.31	-.22	-.08	.55
ユーモアには他者への思いやりが込められている。	.61	.03	.36	.00	.50
ユーモアは喜びの表現である。	.61	.28	.03	-.05	.45
第II因子：機転 ($\alpha = .71$)					
ユーモアにはセンスが必要である。	.17	.85	.07	-.06	.77
ユーモアには知性が出る。	.21	.77	.06	.21	.68
第III因子：風刺 ($\alpha = .40$)					
ユーモアはおかしい。	-.09	.04	.73	-.04	.55
ユーモアは人をばかにしている。	-.37	-.08	.62	.06	.54
ユーモアは社交辞令である。	.13	.05	.51	.08	.29
第IV因子：感情隠蔽 ($\alpha = .41$)					
ユーモアで本音を隠す。	-.19	.22	.06	.84	.79
ユーモアで深刻さをまぎらす。	.41	-.11	.04	.67	.63
固有値	4.92	1.92	1.64	1.32	
寄与率 (%)	30.75	11.97	10.23	8.27	
累積寄与率 (%)	30.75	42.72	52.95	61.22	
クロンバック $\alpha = .80$					

※ゴシックは因子負荷量.50以上。

※「ユーモアには不快感を感じる」「ユーモアは楽しい気分させる」「ユーモアは緊張をほぐす」「ユーモアは場の雰囲気を良くする」は削除した。

表2 微笑みの機能の因子構造

項目	I	II	III	IV	共通性
第I因子：心理社会的効果 ($\alpha = .92$)					
微笑みは場の雰囲気を良くする。	.86	-.05	.05	.10	.75
微笑みは人に良い印象を与える。	.82	-.13	.13	.19	.74
微笑みに癒される。	.82	.10	.00	.06	.68
微笑みはコミュニケーションを促進する。	.77	-.11	-.01	.04	.61
微笑みは緊張をほぐす。	.76	.02	-.07	-.16	.61
微笑みは喜びの表現である。	.74	.39	-.18	0.00	.73
微笑むのは健康に良い。	.71	.25	-.33	.23	.73
微笑むと人と親密になれる。	.62	.41	.05	.17	.58
微笑みには他者への思いやりが込められている。	.61	.29	-.05	.17	.49
微笑みはストレス発散になる。	.61	.34	-.30	.34	.69
第II因子：感情表出・隠蔽 ($\alpha = .39$)					
おかしいから微笑む。	.01	.74	-.08	.05	.56
微笑みで深刻さをまぎらす。	.12	.67	.41	.07	.63
第III因子：社交上の笑い ($\alpha = .37$)					
微笑みで本音を隠す。	-.17	.15	.75	.21	.66
微笑むのは社交辞令である。	.03	-.03	.67	-.12	.47
第IV因子：機転 ($\alpha = .23$)					
微笑むにはセンスが必要である。	.14	-.10	.36	.71	.67
微笑みには知性が出る。	.10	.24	-.21	.68	.58
固有値	5.49	1.72	1.62	1.34	
寄与率 (%)	34.28	10.72	10.15	8.36	
累積寄与率 (%)	34.28	45.00	55.15	63.51	
クロンバック $\alpha = .84$					

※ゴシックは因子負荷量.50以上。

※「微笑みは楽しい気分させる」「微笑むと気持ちすっきりする」「微笑むことは人をばかにしている」「微笑みには不快感を感じる」は削除した。

表3 声を出して笑う機能の因子構造

項 目	I	II	III	IV	V	共通性
第I因子：心理社会的効果 ($\alpha = .89$)						
声を出して笑うことは場の雰囲気良くする。	.80	.20	.10	-.17	.03	.723
声を出して笑うことは緊張をほぐす。	.79	.25	-.01	.07	.00	.699
声を出して笑うと人と親密になれる。	.71	.28	.25	-.14	.03	.653
声を出して笑うことはコミュニケーションを促進する。	.67	.07	.39	-.16	.12	.646
声を出して笑うのは喜びの表現である。	.66	.23	.07	.03	.11	.511
声を出して笑うと人に良い印象を与える。	.65	.26	.39	-.22	-.02	.695
声を出して笑うと癒される。	.64	.27	.06	-.14	.10	.512
第II因子：ストレス発散 ($\alpha = .86$)						
声を出して笑うことはストレス発散になる。	.22	.89	.16	-.15	-.03	.893
声を出して笑うことは楽しい気分にする。	.27	.88	.08	-.14	.04	.883
声を出して笑うと気持ちがすっきりする。	.24	.79	.09	-.08	-.07	.707
声を出して笑うことは健康に良い。	.43	.68	-.06	-.09	.01	.654
おかしいから声を出して笑う。	.21	.53	-.09	.04	.36	.465
第III因子：機転 ($\alpha = .70$)						
声を出して笑うことには知性が出る。	.19	.09	.83	.10	.03	.738
声を出して笑うことにはセンスが必要である。	.26	-.06	.76	-.09	.13	.669
声を出して笑うことで本音を隠す。	-.04	.23	.59	.42	.29	.661
第IV因子：優越 ($\alpha = .65$)						
声を出して笑うのは人をばかにしている。	.00	-.14	.18	.80	-.04	.698
人の笑い声に不快感を感じる。	-.24	-.31	0.00	.65	.19	.605
声を出して笑うことには他者への思いやりが込められている。	.36	.00	.40	-.63	.20	.723
第V因子：社交上の笑い ($\alpha = .48$)						
声を出して笑うことで深刻さをまぎらす。	.27	.06	.07	.25	.79	.765
声を出して笑うのは社交辞令である。	-.09	-.06	.30	-.27	.71	.676
固有値	4.27	3.51	2.33	2.00	1.47	
寄与率 (%)	21.37	17.54	11.64	9.98	7.35	
累積寄与率 (%)	21.37	38.91	50.55	60.53	67.88	
クロンバック $\alpha = .84$						

※ゴシックは因子負荷量.50以上。

表4 お笑いの機能の因子構造

項 目	I	II	III	IV	共通性
第I因子：心理社会的効果 ($\alpha = .93$)					
芸人のお笑いはストレス発散になる。	.81	-.14	.24	.08	.74
芸人のお笑いは緊張をほぐす。	.81	.01	.20	.14	.71
芸人のお笑いは健康に良い。	.80	-.09	.01	-.04	.65
芸人のお笑いは楽しい気分にする。	.80	-.03	.25	.09	.72
芸人のお笑いは場の雰囲気良くする。	.80	-.04	.25	.12	.72
芸人のお笑いを見ると気持ちがすっきりする。	.78	-.14	.13	.20	.68
芸人のお笑いは印象が良い。	.75	-.01	.09	.17	.60
芸人のお笑いに癒される。	.74	-.05	.24	.25	.66
第II因子：軽薄 ($\alpha = .63$)					
芸人のお笑いは人をばかにしている。	-.11	.75	-.14	-.18	.62
芸人のお笑いは本音を隠している。	-.05	.68	.14	.32	.58
芸人のお笑いには不快感を感じる。	-.24	.63	-.41	-.11	.64
芸人のお笑いは社交辞令である。	.03	.62	.14	-.08	.41
第III因子：和み ($\alpha = .66$)					
芸人のお笑いには他者への思いやりが込められている。	.29	-.05	.69	-.02	.57
芸人のお笑いを見て深刻さをまぎらす。	.22	.29	.68	.18	.62
芸人のお笑いの話題で人と親密になれる。	.42	-.27	.60	.15	.63
第IV因子：娯楽 ($\alpha = .55$)					
芸人のお笑いには知性が出る。	.33	-.01	-.23	.70	.65
芸人のお笑いはおかしい。	.00	.02	.33	.69	.59
芸人のお笑いの話題はコミュニケーションを促進する。	.41	-.23	.15	.60	.60
固有値	5.61	2.06	2.01	1.71	
寄与率 (%)	31.19	11.47	11.14	9.50	
累積寄与率 (%)	31.19	42.66	53.80	63.30	
クロンバック $\alpha = .83$					

※ゴシックは因子負荷量.50以上。

※「芸人のお笑いは喜びの表現である」「芸人のお笑いの理解にはセンスが必要である」は削除した。

(2) 各笑いに対する意識と社会的スキル

表5の平均値を基準に被調査者を高低2群に分け、分散分析により社会的スキル得点を比較した(表6)。

- ① ユーモア：第I因子、第II因子で有意、第III因子で有意傾向にあった ($F(1, 100)=6.89, p < .05$; $F(1, 100)=6.89, p < .05$; $F(1, 100)=3.30, p < .10$)。ユーモアには心理社会的効果がある、機転が効いていると思っている人ほど社会的スキルが有意に高く、ユーモアを風刺ととらえる人ほど社会的スキルが低い傾向にあるといえる。
- ② 微笑み：全因子で有意差はみとめられなかった。
- ③ 声を出して笑う：第II因子で有意、第I因子で有意傾向にあった ($F(1, 100)=6.36, p < .05$; $F(1, 100)=3.78, p < .10$)。声を出して笑うとストレスを発散できている人ほど社会的スキルが有意に高く、心理社会的効果があると思っている人ほど社会的スキルが高い傾向にあるといえる。
- ④ お笑い：第I因子で有意傾向にあり ($F(1, 100)=2.82, p < .10$)、お笑いに心理社会的効果があると思っている人ほど社会的スキルが高い傾向にあった。

2 笑いに対する意識と対人葛藤場面における対処方略

(1) 対人葛藤対処方略の因子構造

大淵(2005)の28項目(7因子「主張」「攻撃」「交渉」「宥和」「拒否」「服従」「回避」×4項目)を用いて因子分析を行ったところ、2因子以上に高い因子負荷量をもつ項目がみとめられ、単純な7因子構造ではないことがわかった。複数の因子に.50以上の因子負荷量をもつ項目を削除しながら因子分析をくり返したところ5因子が抽出された(表7)。

第I因子は強引・攻撃的に解決する項目で構成され、また「冷静に話し合いをしようとする」は因子負荷量が-1であることから、他者の意志を無視した強引・攻撃的な「威圧」的な対処方略といえる。第II因子は自他の感情を抑える項目から成る。「怒りを隠さない」は因子負荷量がマイナスであることから感情を露わにしないといえ、「感情抑制」と名づけた。第III因子は第I因子と同様「主張」の項目が含まれるが、第I因子が威圧的に自分の考えを押し通すのに対し、第III因子は間違いを指摘したり、正当性を主張したり、交換条件を出すなど最適な解決法を目指して論じ合う方法であり「議論」と解釈された。第IV因子は「服従」3項目から成り、「服従」とした。第V因子は「回避」「拒否」の項目が混在しているが、接触しない、口をきかない、話題を変えるなど、いずれも相手や衝突を避ける行為であり、「回避」と解釈された。

因子ごとに平均値を算出したところ(表8)、もっとも得点が高かったのは「回避」で、以下、「感情抑制」、「服従」、「議論」、「威圧」と続いた。分散分析の結果、男子の方が女子よりも対人場面で有意に「威圧」「議論」の方略をとっていた ($F(1, 100)=10.38, p < .01$; $F(1, 100)=4.1, p < .05$)。

(2) 対人葛藤対処方略と社会的スキル

表9は社会的スキルを目的変数、(1)で抽出した対人葛藤対処方略5因子を説明変数とするステップワイズ回帰分析の結果である ($F(3, 98)=13.47, p < .01$)。対人葛藤場面で感情抑制する人ほど有意に社会的スキルが高く、回避する人ほど有意に社会的スキルが低く、服従する人ほど社会的スキルが低い傾向にあるといえる。

(3) 各笑いに対する意識と対人葛藤対処方略

各笑いに対する意識と対人葛藤方略の関連を検討するために、各笑いに対する意識の違いにより高群、低群に分け、対人葛藤方略の因子の得点を比較した(表10)。

- ① ユーモア：第I因子は威圧と感情抑制で有意で (各 $F(1, 100)=4.02, p < .05$; $F(1, 100)=8.69, p < .01$)、ユーモアには心理社会的効果があると思っている人ほど対人葛藤場面で有意に威圧的ではなく、感情を抑制していた。第II因子は威圧と感情抑制で有意傾向にあり ($F(1, 100)=2.92, p < .10$; $F(1, 100)=3.69, p < .10$)、ユーモアは機転であると思っている人ほど威圧せず、感情抑制する傾向にあった。第III因子は議論で有意、威圧で有意傾向にあり ($F(1, 100)=3.94, p < .05$; $F(1, 100)=3.67, p < .10$)、ユーモアを風刺ととらえる人ほど有意に議論し、威圧的な傾向にあった。
- ② 微笑み：第I因子は感情抑制で有意、第II因子は服従で有意、回避で有意傾向、第III因子は回避で有意であった (各 $F(1, 100)=8.65, p < .01$; $F(1, 100)=4.93, p < .05$; $F(1, 100)=3.68, p < .10$; $F(1, 100)=6.41,$

表5 各笑いの因子の得点

笑いの種類	因子	属性	N	M	SD	F	笑いの種類	因子	属性	N	M	SD	F
ユーモア	I：心理社会的効果	全体	103	3.76	.68	1.50	声を出して笑う	I：心理社会的効果	全体	103	3.89	.74	1.86
		男子	50	3.68	.67				男子	50	3.79	.76	
		女子	53	3.84	.68				女子	53	3.99	.71	
	II：機転	全体	103	3.92	.81	.01		II：ストレス発散	全体	103	4.42	.68	6.59 *
男子	50	3.91	.88	男子	50		4.25		.84				
女子	53	3.92	.74	女子	53		4.58		.41				
III：風刺	全体	103	2.72	.65	.01	III：機転	全体	103	2.83	.91	.40		
	男子	50	2.74	.63			男子	50	2.89	.90			
女子	53	2.71	.68	女子	53	2.78	.92						
IV：感情隠蔽	全体	103	3.31	.74	.65	IV：優越	全体	103	2.80	.56	.18		
	男子	50	3.25	.69			男子	50	2.83	.60			
女子	53	3.37	.79	女子	53	2.78	.53						
微笑み	I：心理社会的効果	全体	103	3.79	.71	2.60	お笑い	I：心理社会的効果	全体	103	3.77	.85	0.00
		男子	50	3.67	.73				男子	50	.86	.78	
		女子	53	3.89	.69				女子	53	.83	.91	
	II：感情表出・隠蔽	全体	103	3.11	.86	5.11 *		II：軽薄	全体	103	2.88	.73	1.44
男子	50	3.30	.78	男子	50		2.97		.71				
女子	53	2.92	.90	女子	53		2.79		.75				
III：社交上の笑い	全体	103	3.41	.80	1.30	III：和み	全体	103	3.34	.80	.70		
	男子	50	3.32	.71			男子	50	3.28	.82			
女子	53	3.50	.88	女子	53	3.41	.79						
IV：機転	全体	103	3.02	.80	1.08	IV：娯楽	全体	103	3.69	.71	.68		
	男子	50	2.94	.70			男子	50	3.63	.70			
女子	53	3.10	.88	女子	53	3.75	.71						

※ * $p < .05$

表6 各笑いに対する意識・高低2群の社会的スキル得点

笑いの種類	因子	属性	N	M	SD	F	笑いの種類	因子	属性	N	M	SD	F
ユーモア	I：心理社会的効果	全体	102	53.83	12.41	6.89 *	声を出して笑う	I：心理社会的効果	全体	102	53.83	12.41	3.78 †
		高群	53	56.85	12.23				高群	48	56.33	12.68	
		低群	49	50.57	11.88				低群	54	51.61	11.85	
	II：機転	全体	102	53.83	12.07	6.89 *		II：ストレス発散	全体	102	53.83	12.41	6.36 *
高群	63	56.30	12.06	高群	56		56.57		12.79				
低群	39	49.85	12.41	低群	46		50.50		11.20				
III：風刺	全体	102	53.83	13.29	3.30 †	III：機転	全体	102	53.83	12.41	.09		
	高群	51	51.58	11.22			高群	47	53.43	12.80			
低群	52	56.00	12.41	低群	55	54.18	12.19						
IV：感情隠蔽	全体	102	53.83	12.41	2.65	IV：優越	全体	102	53.83	12.41	0.00		
	高群	46	56.02	12.35			高群	50	53.82	13.00			
低群	56	52.04	12.29	低群	52	53.85	11.95						
微笑み	I：心理社会的効果	全体	102	53.83	12.41	1.44	お笑い	I：心理社会的効果	全体	102	53.83	12.41	2.82 †
		高群	57	55.14	12.79				高群	50	55.92	11.95	
		低群	45	52.18	11.86				低群	52	51.83	12.63	
	II：感情表出・隠蔽	全体	102	53.83	12.41	.41		II：軽薄	全体	102	53.83	12.41	.51
高群	40	52.85	12.09	高群	60		53.10		12.51				
低群	62	54.47	12.67	低群	42		54.88		12.35				
III：社交上の笑い	全体	102	53.83	12.41	.25	III：和み	全体	102	53.83	12.41	.07		
	高群	58	53.29	13.12			高群	41	54.24	12.30			
低群	44	54.55	11.53	低群	61	53.56	12.59						
IV：機転	全体	102	53.83	12.41	1.67	IV：娯楽	全体	102	53.83	12.41	0.00		
	高群	39	55.85	14.08			高群	41	53.85	12.63			
低群	63	52.59	11.20	低群	61	53.82	12.38						

※ * $p < .05$ † $p < .10$

表7 対人葛藤対処方略の因子構造

項 目	I	II	III	IV	V	共通性
第I因子：威圧 ($\alpha = .83$)						
人と対立したら、むりやり相手を自分に従わせる (主張)。	.72	-.30	.03	-.26	-.08	.68
人と対立したら、相手をおどしてこわがらせる (攻撃)。	.70	-.26	.14	-.04	-.04	.58
人と対立したら、まず相手を激しく非難する (攻撃)。	.69	-.35	.23	.07	.01	.66
人が違った意見をもっていても、それを無視して、自分の思ったとおりにする (拒否)。	.67	-.09	.27	-.04	.26	.60
人と対立したら、黙り込んで、相手の言うことをきかない (拒否)。	.66	.19	-.09	.07	.28	.56
人と対立したら、強引でも、自分の意見を押しつける (主張)。	.65	-.10	.34	-.06	.14	.56
人と対立したら、とにかく冷静に話し合いをしようと努める (交渉)。	-.50	.46	.36	-.34	.00	.71
第II因子：感情抑制 ($\alpha = .78$)						
人と対立したら、とにかく穏やかに説得しようとする (交渉)。	-.25	.68	.35	-.01	.00	.64
人と対立したら、下手に出て、相手の感情をしずめようとする (宥和)。	.00	.67	-.04	.11	.03	.46
人と対立したら、まず相手の気持ちをなだめる (宥和)。	-.02	.63	.06	-.18	-.05	.44
人と対立したら、相手が感情的にならないよう気をくばる (宥和)。	-.22	.63	-.08	.04	.00	.46
人と対立したら、しんぼう強く意見の調整をはかる (交渉)。	-.18	.60	-.12	-.34	.10	.54
考えの違いがあっても、それが表面化しないように努める (回避)。	-.21	.53	.04	.25	.21	.44
人と争いになると、怒りを隠さない (攻撃)。	.18	-.61	.31	-.37	.11	.65
第III因子：議論 ($\alpha = .69$)						
人と対立したら、相手の方が間違っていると責める (攻撃)。	.26	-.20	.81	.07	.02	.77
人と対立したら、とにかく自分の方が正しいことを主張する (主張)。	.39	-.03	.70	-.22	-.10	.70
人と対立したら、交換条件などを示して、なんとか話をまとめようと工夫する (交渉)。	.15	.30	.54	.09	-.05	.41
第IV因子：服従 ($\alpha = .71$)						
人と対立したときは、相手の言うとおりにする (服従)。	-.10	-.11	.06	.83	.07	.71
人と対立したら、自分を抑えて、相手の意見に従う (服従)。	-.07	.00	.07	.79	.05	.64
人と対立したら、自分の主張を引っ込める (服従)。	.11	.31	-.39	.62	.19	.67
第V因子：回避 ($\alpha = .61$)						
対立しそうな相手とは、気を付けてなるべく接触しないようにする (回避)。	.16	.05	-.12	.11	.75	.61
嫌なことがあったら、その相手とは口をきかない (拒否)。	.26	-.14	0.00	-.14	.72	.63
人と対立しそうになったら、話題を変える (回避)。	-.25	-.04	.46	.13	.60	.65
人と意見の相違があっても、それに気づかない振りをする (回避)。	.04	.32	-.09	.27	.56	.49
固有値	3.91	2.69	2.64	2.15	1.86	
寄与率 (%)	17.75	12.21	12.00	9.76	8.47	
累積寄与率 (%)	17.75	29.96	41.96	51.72	60.19	
クロンバック $\alpha = .62$						

※ゴシックは因子負荷量.500以上。

※各項目文末の () は大淵 (2005) における因子を表す。

※「人と対立したら、表だっては反抗しないが、相手の言うこともきかない (拒否)」 「人と対立したら、自分の考えや要求を強く主張する (主張)」 「人と対立したら、自分の方から譲歩する (服従)」 「人と対立したら、愛想よくするなどして、相手の気持ちを和らげようと努める (宥和)」 は削除した。

表8 対人葛藤方略・各因子の得点

葛藤方略	属性	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>
第I因子：威圧	全体	102	2.24	.56	10.38 **
	男子	49	2.41	.57	
	女子	53	2.07	.51	
第II因子：感情抑制	全体	102	3.15	.51	.71
	男子	49	3.20	.50	
	女子	53	3.11	.51	
第III因子：議論	全体	102	2.50	.79	4.11 *
	男子	49	2.66	.66	
	女子	53	2.35	.88	
第IV因子：服従	全体	102	2.73	.77	.04
	男子	49	2.74	.62	
	女子	53	2.71	.90	
第V因子：回避	全体	102	3.03	.71	.19
	男子	49	3.07	.74	
	女子	53	3.00	.69	

※ ** $p < .01$ * $p < .05$

表9 対人葛藤方略の因子から社会的スキルへの回帰係数 (β)

因子	β	R^2
第II因子 感情抑制	.447 **	0.54
第V因子 回避	-.255 **	
第VI因子 服従	-.163 †	

※ ** $p < .01$ † $p < .10$

$p < .05$)。微笑みには心理社会的効果があると思っている人ほど対人葛藤場面で有意に感情抑制し、微笑みで感情を表出・隠蔽すると思っている人ほど有意に服従し、また回避する傾向にあり、微笑みは社交上の笑いであると思っている人ほど有意に回避していた。

- ③ 声を出して笑う：第I因子は威圧と服従で有意傾向にあり ($F(1, 100) = 3.00, p < .10$; $F(1, 100) = 3.79, p < .10$)、声を出して笑うことには心理社会的効果があると思っている人ほど威圧や服従はしない傾向にあった。第II因子は威圧と回避で有意、感情抑制と服従で有意傾向にあり ($F(1, 100) = 10.08, p < .01$; $F(1, 100) = 7.00, p < .01$; $F(1, 100) = 2.80, p < .10$; $F(1, 100) = 2.96, p < .10$)、声を出して笑うとストレス発散になると知っている人ほど有意に威圧や回避はせず、感情を抑制する傾向にあり、服従しない傾向にあった。第III因子は議論で有意傾向、威圧で有意で ($F(1, 100) = 4.13, p < .05$; $F(1, 100) = 3.68, p < .10$)、声を出して笑うのは機転であると思っている人ほど有意に議論をし、威圧的でない傾向にあった。第V因子は議論で有意傾向にあり ($F(1, 100) = 2.96, p < .10$)、声を出して笑うのは社交上の笑いであると思っている人ほど議論をする傾向にあった。
- ④ お笑い：第I因子は威圧と感情抑制で有意、第IV因子は威圧で有意であった ($F(1, 100) = 4.93, p < .05$; $F(1, 100) = 5.47, p < .05$; $F(1, 100) = 4.69, p < .05$)。お笑いには心理社会的効果があると思っている人ほど有意に威圧的でなく、感情抑制し、お笑いは娯楽という意識が強い人ほど有意に威圧的ではなかった。

表10 各笑いに対する意識・高低2群の対人葛藤方略・各因子の得点

笑いの種類	因子	群	N	I 威圧			II 感情抑制			III 議論			IV 服従			V 回避		
				M	SD	F	M	SD	F	M	SD	F	M	SD	F	M	SD	F
ユーモア	I 心理社会的効果	高群	53	2.13	.55	4.02 *	3.29	.52	8.65 **	2.50	.79	.00	2.70	.77	.08	3.03	.72	.01
		低群	49	2.35	.56		3.01	.45		2.50	.80		2.75	.78		3.04	.71	
	II 機転	高群	63	2.16	.56	2.92 †	3.23	.48	3.69 †	2.47	.82	.17	2.68	.88	.50	3.05	.77	.10
		低群	39	2.36	.55		3.03	.54		2.54	.76		2.79	.55		3.01	.60	
	III 風刺	高群	50	2.34	.55	3.67 †	3.13	.54	.30	2.65	.83	3.94	2.78	.71	.48	3.06	.73	.13
		低群	52	2.13	.57		3.18	.48		2.35	.73		2.67	.84		3.01	.69	
	IV 感情隠蔽	高群	46	2.20	.53	.35	3.23	.49	1.73	2.62	.85	2.16	2.64	.81	.91	3.02	.70	.03
		低群	56	2.27	.59		3.09	.52		2.39	.74		2.79	.75		3.04	.72	
微笑み	I 心理社会的効果	高群	57	2.22	.55	.12	3.28	.47	8.65 **	2.50	.78	.01	2.74	.76	.06	3.05	.73	.09
		低群	45	2.26	.58		2.99	.51		2.49	.82		2.70	.80		3.01	.69	
	II 感情表出・隠蔽	高群	40	2.25	.57	.04	3.23	.51	1.57	2.61	.79	1.31	2.93	.75	4.93 *	3.20	.71	3.68 †
		低群	62	2.23	.57		3.10	.50		2.42	.79		2.59	.77		2.93	.69	
	III 社交上の笑い	高群	58	2.26	.51	.18	3.15	.48	.02	2.56	.81	.79	2.68	.78	.50	3.19	.66	6.41 *
		低群	44	2.21	.63		3.16	.55		2.42	.77		2.79	.76		2.84	.73	
	IV 機転	高群	39	2.21	.51	.18	3.25	.60	2.07	2.53	.84	.11	2.71	.78	.03	3.00	.81	.15
		低群	63	2.25	.60		3.10	.44		2.48	.77		2.74	.78		3.06	.64	
声を出して笑う	I 心理社会的効果	高群	48	2.13	.57	3.00 †	3.16	.57	.03	2.43	.88	.63	2.57	.75	3.79 †	2.94	.78	1.52
		低群	54	2.33	.54		3.15	.45		2.56	.71		2.86	.78		3.12	.64	
	II ストレス発散	高群	56	2.08	.52	10.08 **	3.23	.57	2.80 †	2.39	.81	2.42	2.61	.82	2.96 †	2.87	.75	7.00 **
		低群	46	2.42	.56		3.06	.41		2.63	.76		2.87	.70		3.23	.61	
	III 機転	高群	47	2.35	.53	3.68 †	3.18	.58	.27	2.67	.84	4.13 *	2.71	.67	.04	2.97	.74	.64
		低群	55	2.14	.57		3.13	.44		2.35	.73		2.74	.86		3.09	.69	
	IV 優越	高群	50	2.24	.54	.01	3.20	.50	.70	2.57	.85	.91	2.76	.70	.19	2.98	.73	.68
		低群	52	2.23	.59		3.11	.51		2.42	.74		2.69	.84		3.09	.69	
V 社交上の笑い	高群	39	2.28	.56	.43	3.20	.62	.55	2.67	.77	2.96 †	2.71	.59	.03	3.13	.79	1.26	
	低群	63	2.21	.57		3.12	.43		2.39	.79		2.74	.87		2.97	.66		
お笑い	I 心理社会的効果	高群	50	2.11	.55	4.93 *	3.27	.53	5.47 *	2.51	.85	.04	2.76	.83	.19	3.00	.74	.23
		低群	52	2.35	.55		3.04	.46		2.48	.75		2.69	.73		3.07	.68	
	II 軽薄	高群	60	2.30	.56	2.24	3.09	.50	2.14	2.52	.72	.09	2.69	.78	.23	3.05	.75	.11
		低群	42	2.14	.55		3.24	.52		2.47	.90		2.77	.77		3.01	.66	
	III 和み	高群	41	2.13	.58	2.48	3.21	.57	.80	2.62	.93	1.61	2.80	.67	.72	2.93	.74	1.40
		低群	61	2.31	.54		3.12	.46		2.42	.68		2.67	.84		3.10	.69	
	IV 娯楽	高群	41	2.09	.55	4.69 *	3.21	.54	.80	2.50	.92	.01	2.75	.91	.06	2.95	.81	1.08
		低群	61	2.33	.56		3.12	.49		2.49	.70		2.71	.68		3.09	.63	

※ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

考 察

因子分析によりユーモア、微笑み、声を出して笑う、お笑いすべてに心理社会的効果があることが確かめられ、個人への心理的効果と対人関係促進効果が明確には区分できないことが示された。お笑いを除くユーモア、微笑み、声を出して笑うことには機転の機能がみとめられ、対人場面で機転をきかして笑いを取り入れていることが示唆された。笑い反応（微笑みと声を出して笑う）には社交上の笑いという共通性が見いだされ、対人場面において笑いが印象形成に関連していること、笑いが場を取り繕う意図で用いられていることが示唆された。

ユーモアと微笑みには感情隠蔽の機能も含まれ、おかしさ以外の感情表現の機能を併せ持つことがわかった。ユーモアの風刺、声を出して笑うの優越も同様であり、笑いの攻撃的な側面、笑いが諸刃の剣となり得ることを示しており、Morreal (1983)の優越理論と一致する。

各笑いについて検討を行う前に、対人葛藤方略の因子分析結果について触れておきたい。本研究では葛藤対処方略として威圧、感情抑制、議論、服従、回避の5因子が抽出され、大淵（2005）があげた7因子のうち明確に区別できたのは「服従」のみであった。威圧は「主張」「攻撃」「拒否」、および「交渉」（因子負荷量マイナス）で構成される。このうち「主張」「攻撃」「交渉」は積極的方略、「拒否」は消極的方略とされるが、大淵が「拒否」は行為者の意図としては「主張」「攻撃」と同じで行動形態が相手との相互作用を拒否するものだと指摘するように、矛盾するものとはいえない。

大淵（2005）の「交渉」「宥和」（いずれも積極的方略）は本研究では区別されず、感情抑制と解釈された。葛藤場面で話し合いによって利害調整をはかるためには他者のみならず自己の感情もコントロールすることが必要であることがわかる。「攻撃」「主張」「交渉」（いずれも積極的方略）は本研究では議論と解釈された。最良の解決法を探るために、3つの方法が議論という手段に統合され得ることがわかる。「回避」「拒否」は明確に区別されなかったが、大淵（2005）においてもこの2つには正の相関がみとめられ、「回避」は拒否的、協調的どちらの目的でも使われる多義的意味合いをもつと指摘されている。構成項目から威圧、感情抑制、議論は積極的方略に、服従と回避は消極的方略に大別できるであろう。感情抑制は消極的方略とも受け取れるが、感情抑制する人ほど社会的スキルが高いというステップワイズ回帰分析の結果からも積極的方略とみなすこととする。

笑いに対する意識と社会的スキル、葛藤対処方略との関連から、4種類の笑いそれぞれの特徴、および対人場面におけるコミュニケーションへの影響等について考察を行う。ユーモアの4因子のうち、心理社会的効果と機転は笑いのストレートでポジティブな側面、風刺と感情隠蔽はひとひねりした笑いの側面といえる。心理社会的効果、および機転の意識が強い人ほど社会的スキルが高く、対人葛藤場面で感情抑制し威圧的ではなかった。したがって、ユーモアを肯定的にとらえる人、ユーモアは機転であると思っている人ほど他者と上手に関わっており、対人葛藤場面で感情的にならずに機転の効いたユーモアでかわすことが示唆された。一方、ユーモアを風刺ととらえる人ほど社会的スキルが低く、対人葛藤場面で威圧的で議論の方略をとっていたことから、ユーモアは強く自己主張する際にも有効であることが示唆された。以上のことから、ユーモアは協調的な関わり、攻撃的な関わり、いずれにも用いられるなど対照的な側面を併せもつといえるが、いずれもしても積極的方略と関連していた。

微笑みには心理社会的効果、感情表出・隠蔽、社交上の笑い、機転の機能が見いだされたが、社会的スキルとの関連はみとめられず、対人場面において微笑みが効果的に用いられていないことが示唆された。このことは対人葛藤方略との関連でさらに明白になった。微笑みで感情を表出・隠蔽する、微笑みは社交上の笑いであると思っている人ほど対人葛藤場面で服従や回避の方略をとっており、自己主張せずに他者の要求に従ったり、感情を微笑みで隠してその場を取り繕い不一致を回避していることが示唆された。

声を出して笑うことには心理社会的効果、ストレス発散、機転というストレートでポジティブな側面のほか、優越、社交上の笑いという機能も見いだされた。心理社会的効果、ストレス発散の意識が強い人ほど社会的スキルが高く、対人葛藤場面で威圧的ではなかったことから、笑いを肯定的にとらえる人ほど協調的に対人葛藤に対処することが示唆された。また、声を出して笑うとストレス発散になると思っている人ほど感情を抑制していた。一見パラドックスのようだが、声を出して笑って感情を大らかに表出することとネガティブな感情を抑制するこ

とは、感情をコントロールし、上手に感情表現できることの表れとみなすことができる。このことは服従や回避との関連からもみてとれる。心理社会的効果やストレス発散の意識が強い人ほど対人葛藤場面で服従や回避をしていなかった。葛藤場面で機転をきかして声を出して笑い、感情表現し、服従や回避をすることなく葛藤に対処していることが示唆された。一方、声を出して笑うのは機転であると思っている人ほど対人葛藤場面では威圧的で議論しており、また社交上の笑いであるという意識が強い人ほど議論していた。優越の機能からもわかるとおり、声を出して笑うことには攻撃的な意味合いも含まれるのである。

つまり、同じ笑い反応でも、微笑むのと声を出して笑うのとでは本人にとっての意味合いも相手に及ぼす影響も随分と異なるのである。微笑みに対する意識と社会的スキルには関連がみとめられなかったことから、場を取り繕うために感情を隠し微笑んでも、そうした意図がそもそも相手に伝わっていない可能性さえある。日本人の微笑みが異文化の人たちに不可解さを与えることはしばしば指摘されるどころだが、同一文化内においても同様のことが起こっていると推察される。対人葛藤場面で効果的に微笑みを用いるには注意が必要といえそうだ。

芸人のお笑いについては、心理社会的効果、軽薄、なごみ、娯楽の機能がみとめられた。娯楽の機能に端的に表れているように芸人のお笑いは他の3つの笑いとは一線を画しており、また軽薄、和みという対照的な印象を与えることがわかった。お笑いが肯定的、否定的どちらにも受け取られることは、テレビのパラエティ番組等に対して視聴者から批判意見が寄せられることから窺われる。お笑いには心理社会的効果があると思っている人ほど社会的スキルが高く、対人葛藤場面で感情抑制し、威圧的ではなく、また娯楽の意識が強い人ほど威圧的ではなかった。つまりお笑いに肯定的な人ほど葛藤場面で感情を抑制し、協調的に対処するなど社会的スキルが高いといえる。

本研究の結果をまとめると以下ようになる。笑いの種類にかかわらず、笑いに肯定的な人ほど社会的スキルが高かった。他者と協調的に関わるには機転の効いた場を和ませる笑いが、逆に強引にでも自分の要求を通した場合は風刺や優越の笑いが有効なことが示され、また微笑みは葛藤を回避したり服従するのに用いられるが効果的な葛藤対処方略とはいえないことが示唆された。このように、ユーモア、微笑み、声を出して笑う、芸人の笑いという4種類の笑いを取り上げることでそれぞれの笑いの共通点と特性が浮き彫りにされ、また対人コミュニケーションにおいて各笑いがどのように用いられているかについて示唆に富む結果が得られた。本研究で焦点を当てたのは笑いに対する意識であり、実際の対人場面での言動に笑いがどう取り入れられているかと対人コミュニケーションとの関連については今後の課題とされる。

追記

本研究は、日本健康心理学会第20回記念大会（2007年9月1日、早稲田大学）、および第72回日本民族衛生学会総会（2007年11月7日、富山大学）において発表されたものに一部再分析を加えたものである。

謝辞

質問紙調査にご協力いただいた学生の皆様、および調査準備・データ分析にご協力いただいた作新学院大学大学院心理学研究科の荒井宏太さん、上兼さとみさん、大島麻衣さん、神山和也さん、菊地碧さん、林正道さん、原田麻子さん、渡辺有香さんにこころより御礼申し上げます。

文献

- 浅田由美 (2004) 心理臨床場面における笑いの取り扱い—その効用と実際—、展望について、*九州大学心理学研究*、5、153-161
 札埜和夫 (1999) 「おかん」をめぐる笑いの諸相、*笑い学研究*、6、36-47
 碓朋子 (2003) テレビ広告に対する受け手の反応における笑いの文化の地域性の検討、*笑い学研究*、10、71-89
 井上宏 (2002) 「笑い学」研究について、*笑い学研究*、9、3-15
 伊丹仁朗、昇幹夫、手嶋秀毅 (1994) 笑いと免疫機能、*心身医学*、34(7)、565-571

- 伊丹仁朗 (1997) *笑い—心と免疫をつなぐもの—* 東京：創元社
- 伊丹仁朗 (1998) *生きがい療法でガンに克つ* 東京：講談社
- 角辻豊 (1996) *笑いのちから—ストレス時代の快樂学—* 東京：家の光協会
- 菊池章夫 (1988) *思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル—* 東京：川島書店
- 桐田隆博 (2003) 面接場面の笑い—笑いながら話す現象 (laugh-speak) とその機能—, *電子情報通信学会技術研究報告*, 102(734), 1-6
- 桐田隆博 (2005) 人が笑いながら話すとき—認知心理学的アプローチ—, *基礎心理学研究*, 23(2), 207-212
- Matsumoto D and Kudoh T (1993): American-Japanese cultural differences in attributions of personality based on smiles. *Journal of Nonverbal Behavior*, 17(4), 231-243
- Morreall J (1983): *Taking laughter seriously*. New York: State University of New York Press
- 西田元彦、大西憲和 (2001) 笑いとNK細胞活性の変化について、*笑い学研究*, 8, 27-33
- 大淵憲一 (2005) 対人葛藤における消極的方略—新しい対人葛藤スタイル尺度の開発に向けて—, *東北大学大学院文学研究科年報*, 50, 78-92
- 志岐裕子 (2006) 他者への同調とタレントへの役割期待が笑い反応に及ぼす効果、*社会心理学研究*, 22(2), 189-197
- 志水彰 (2000) *笑いその異常と正常* 東京：勁草書房
- 高下保幸、上野良重 (1991) ストレス緩和剤としてのユーモア *現代のエスプリ*, 290, 204-215 東京：至文堂